

# 田 村 17

— 田村遺跡第25次調査報告書 —

2011

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

今回報告いたしますのは、福岡市西部を占める早良平野に立地する田村遺跡の発掘調査成果です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた地権者をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 本文 目 次

I	はじめに .....	1
	1. 発掘調査に至る経緯 .....	1
	2. 調査の組織 .....	1
II	遺跡の位置と歴史的環境 .....	2
	1. 遺跡の立地 .....	2
	2. 遺跡の歴史的環境 .....	2
	3. 遺跡の概要 .....	4
III	調査の記録 .....	6
	1. 試掘調査の概要 .....	6
	2. 発掘調査の概要 .....	6
	3. 遺構 .....	7
	4. 遺物 .....	10
IV	まとめ .....	12

### 挿図 目次

Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000) .....	1	Fig. 6 摂立柱建物SB01実測図 (1/60) .....	9
Fig. 2 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	3	Fig. 7 摂立柱建物SB01柱穴出土遺物実測図 (1/3) .....	11
Fig. 3 遺跡調査位置図 (1/8,000) .....	5	Fig. 8 摂立柱建物SB02柱穴出土遺物実測図 (1/3) .....	11
Fig. 4 調査地位置図 (1/1,500) .....	6	Fig. 9 柱穴出土遺物実測図 (1/3) .....	11
Fig. 5 遺構配置図 (1/100) .....	8	Fig. 10 遺構検出時出土遺物実測図 (1/3) .....	11

### 図版 目次

PL. 1 調査地周辺航空写真 (1948年撮影) .....	.....	PL. 4 (1) 摂立柱建物SB01 (西から) .....	9
PL. 2 調査地周辺航空写真 (2010年撮影) .....	.....	(2) 摂立柱建物SB01 (南から) .....	.....
PL. 3 (1) 調査区全景 (南から)	.....	PL. 5 出土遺物 .....	.....
(2) 調査区全景 (東から) .....	.....		

### 凡 例

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区田村四丁目60-1地内の店舗建設工事予定地内において、2009年度（平成21年度）に実施した田村遺跡群第25次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構実測図に付した座標値は平面直角座標形第II座標系（世界測地系）による座標値である。方位は磁北で、真北に対して6°18'、座標北に対して6°0' 西偏する。
3. 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSB（建物）、SD（溝）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
4. 本書の執筆・編集および本書に掲載された遺構や遺物の撮影・実測は、瀧本正志がおこなった。
5. 発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
田村遺跡群	25次	0914	TMR 25	早良区田村四丁目60-1	228.3m <sup>2</sup>	2009.7.1~2009.7.16

## I はじめに

### 1. 発掘調査に至る経緯

土地所有者から平成21年（2009年）2月27日、福岡市早良区田村四丁目60 1地内における埋蔵文化財事前審査願い（審査番号20 2 922）が福岡市教育委員会へ提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地域である「田村遺跡」の南東部に位置し、隣接地における埋蔵文化財調査（田村遺跡第14次・21次）では12世紀を前後する中世集落や土器生産工房関連施設、さらには纏文時代の遺物等が発見されていることから遺跡の存在が十分に想定された。

このため、埋蔵文化財第1課は平成21年（2009年）3月31日、申請地において試掘調査（試掘番号20 337）を行い、地表下30cmの地層面において中世集落に関連すると考えられる溝や小穴を検出した。遺物の出土は認められなかつたが、遺構の残存状況や隣接地における調査成果などから当該地においては中世の遺跡の存在が推定され、計画される開発事業が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断した。試掘調査結果を依頼者に回答するとともに文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施することとし、土地所有者を委託者、福岡市長を受託者とする契約を平成21年6月20日付で締結した。発掘調査は平成21年度、資料整理は平成22年度に実施した。

### 2. 調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣
		文化財部長	宮川 秋雄
		埋蔵文化財第2課長	田中 寿夫
調査・整理担当		文化財主事	滝本 正志
庶務・経理担当			古賀 とも子



Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000)

【国土地理院発行20万分の1地図図 福岡 無使用】

## II 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の立地

福岡市の北半部、博多湾を囲むように位置する平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的には幾つかの平野から構成されている。この福岡平野の西部を占める早良平野は、西辺は背振山、東辺は油山からそれぞれ北へ派生する山嶺や低丘陵で画され、平野中央を北貫して博多湾に達する室見川とその支流によって形成された沖積地である。平野を誕生させた河川は、わが国の河川が有する特質と同様に急勾配で流路が短い。このため、丘陵裾部から河口近辺に至る表土の土質は砂礫を中心で、平野全体が扇状地を呈していると言えよう。

### 2. 遺跡の歴史的環境

田村遺跡は、早良平野の中央部、早良区田村に所在し、その範囲は東西700m・南北800mを測る。標高は14~17mを呈し、最近では少なくなってきたが周辺には低位水田が広がっている。

田村遺跡周辺においては原始より連続的に人々の生活の跡を見ることができる。

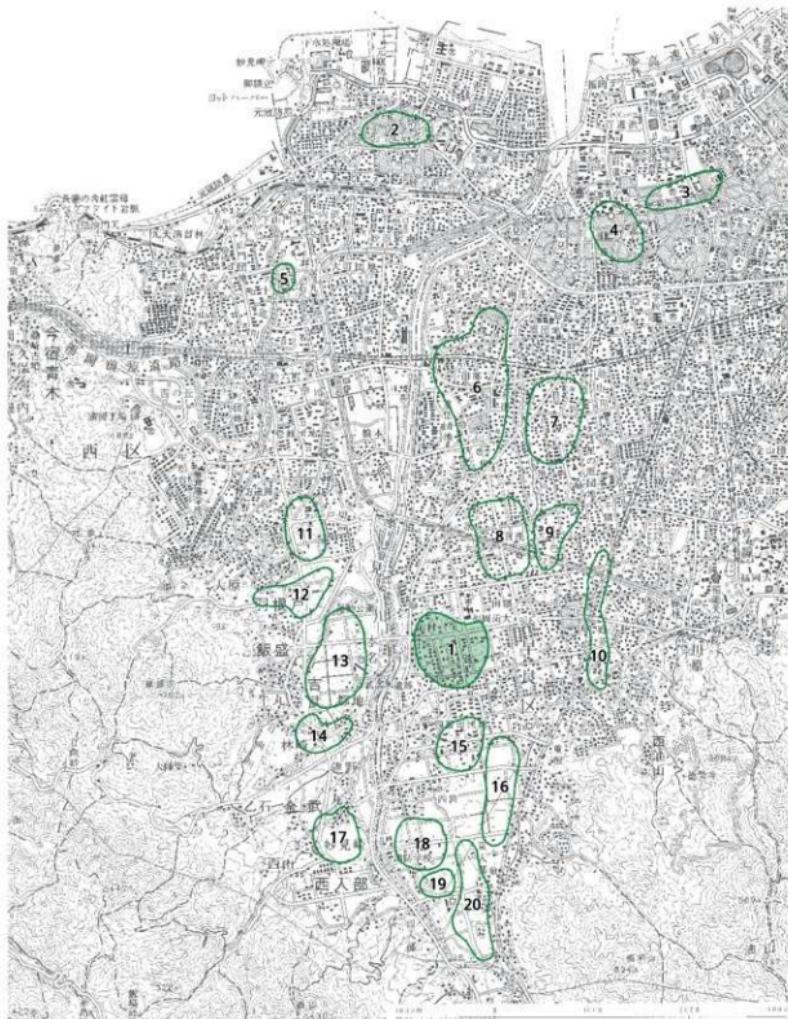
縄文時代の遺跡としては、田村遺跡の南に位置する四面遺跡や岩本遺跡がある。早期～晚期に至る各期の遺構・遺物が多数確認されており、周辺地形や当時の生活環境を知ることができる。

弥生時代の前半期の遺跡としては、田村遺跡の南に位置する東入部遺跡群や西の室見川を越えてある吉武高木遺跡がある。東入部遺跡群や吉武高木遺跡は弥生時代前記～中期にかけての槨棺墓を中心とする埋葬遺跡で、一部の墓には刺装飾品などが副葬されている。中期～後期にかけては早良平野の海浜部近くでも数多くの遺跡が発見されており、著名な遺跡だけでも藤崎遺跡、蛭浜遺跡、拾六町ツイジ遺跡、野方遺跡、野方久保遺跡、有田遺跡群、原遺跡群などがあげられる。これらの遺跡の大半は埋葬遺跡であるが、各時期における遺跡の出現は、土木技術等の発達もしくは取り入れに裏打ちされた平野低地への進出を明示している。

古墳時代には、室見川両岸において樋渡古墳、押塚古墳、梅林古墳などの一連の首長墓が造営される。古墳時代後期には平野を囲む油山、飯盛山、叶岳等の山麓に小規模な円墳等が築かれ、群集墳が形成される。

古代から中世の遺跡としては下山門敷町遺跡、有田遺跡、原遺跡、清末遺跡などがある。田村遺跡の南に位置する清末遺跡では在地豪族の居館と推定される建物跡や堀が発見されている。

また、調査地周辺においては、最近までPL.1でも明らかなように整然とした方形の地割り、すなわち条里地形が良好な状態で残っていた。



- |             |          |          |             |
|-------------|----------|----------|-------------|
| 1. 田村遺跡     | 2. 桥浜遺跡  | 3. 西新町遺跡 | 4. 藤崎遺跡     |
| 5. 下山門敷町遺跡  | 6. 有田遺跡  | 7. 原遺跡   | 8. 次郎丸・高石遺跡 |
| 9. 免遺跡      | 10. 野芥遺跡 | 11. 戸切遺跡 | 12. 羽根戸原C遺跡 |
| 13. 吉武・高木遺跡 | 14. 都地遺跡 | 15. 四箇遺跡 | 16. 重留遺跡    |
| 17. 浦江遺跡    | 18. 清末遺跡 | 19. 安通遺跡 | 20. 東入部遺跡   |

Fig.2. 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)

### 3. 遺跡の概要

田村遺跡においては、これまでに25次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代早期～近世に至る多くの遺物・遺構が発見されてきている。これらの成果から、田村遺跡における歴史的隆盛期は縄文時代後・晚期、弥生時代、平安時代～室町時代初頭の三期があげられる。特に、掘立柱建物群を中心とした中世集落の状況は、今後の中世村落における社会構造を知る上で貴重な資料を提供している。

田村遺跡調査概要

次数	番号	期間	面積(m <sup>2</sup> )	主な遺構	調査報告書
1	7803	1978.10.11 1978.12.2	3,000m <sup>2</sup>	古墳時代(4c後半)土坑 中世(10c)土坑	福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集
2	8034	1980.12.5 ~	2,650m <sup>2</sup>	縄文時代後・晚期:埋葬 弥生時代中期:河川・井垣	福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集
	8035	1981.4.14		古墳:竪穴住居・土坑墓群 中世(11c後半-14c初頭)掘立柱建物群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集
3	8144	1981.4.22	12,820m <sup>2</sup>	弥生時代前期～中期:竪穴住居・土坑・河川・杭列	福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集
	8145	~		古墳時代:水坑	
4	8146	1982.5.15	8,500m <sup>2</sup>	古墳時代:井垣・石器・土器	福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集
	8233	1983.6.15		中世(11c)掘立柱建物・井戸・土坑	
5	8404	1984.7.1 ~ 1985.7.6	17,000m <sup>2</sup>	縄文時代晚期:溝・土坑 弥生時代前期:復縄墓	福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集
	8429	1984.8.1 ~ 1984.9.10		中世(11c-14c)掘立柱建物・井戸・土坑・溝	
6	8447	1984.12.1 ~ 1984.12.29	1,800m <sup>2</sup>	縄文時代後・晚期:小穴	整理中
	8847	1988.12.2 ~ 1989.3.11		古墳時代(5c)竪穴住居	福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集
7	8934	1989.7.5 ~ 1989.8.16	540m <sup>2</sup>	中世(12c-13c)条里地割溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集
	8970	1990.2.8 ~ 1990.3.31		中世:溝・柱穴	福岡市埋蔵文化財調査報告書第524集
8	9059	1991.1.16 ~ 1991.3.9	656m <sup>2</sup>	中世(12c-13c)条里地割溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集
	9242	1992.10.26 ~ 1992.12.14		中世(12c-13c)条里地割溝・土坑・井戸	福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集
9	9247	1992.12.1 ~ 1993.1.30	581m <sup>2</sup>	中世(12c-13c)条里地割溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集
	9248	1992.11.30 ~ 1993.1.31		古代末～中世(10c後半-12c)掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集
10	9320	1993.6.17 ~ 1993.7.31	740m <sup>2</sup>	古代末～中世(10c後半-12c)掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集
	9321	1993.6.28 ~ 1993.6.29		時代不定:旧河川	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.8
11	9358	1994.1.15 ~ 1994.2.5	372m <sup>2</sup>	弥生時代中期:竪穴住居・溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第524集
	9624	1996.8.2 ~ 1996.8.7		中世前期(12c-14c)掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集
12	9728	1997.7.24 ~ 1997.8.8	315m <sup>2</sup>	中世(13c-14c)土器・溝状遺構・掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.12
	9748	1997.10.20 ~ 1997.11.14		縄文時代:河川 弥生時代前期～中期:土坑・溝・竪穴住居	福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集
13	0652	2006.11.8 ~ 2007.4.27	3,977m <sup>2</sup>	縄文時代晚期:土坑・溝 中世(11-12c)集落(陶器工房等)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1031集
	0747	2007.10.31 ~ 2008.1.31		古代末:溝・中世前期(12c-14c)掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1080集
14	0838	2008.9.1 ~ 2008.11.21	781m <sup>2</sup>	時期不定:土坑・溝・河川	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1080集
	0912	2009.6.10 ~ 2009.6.30		縄文時代後・晚期:土坑 中世(12c)流路・小穴	整理中
15	0914	2009.7.1 ~ 2009.7.16	228m <sup>2</sup>	中世(12c-13c)掘立柱建物	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1118集
	0918	2009.8.3 ~ 2009.8.18		弥生時代後期:土坑 中世:条里地割溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1119集



Fig. 3 遺跡調査位置図 (1/8,000)

### III 調査の記録

#### 1. 試掘調査の概要

試掘調査は2009年3月31日、申請地三筆の南北方向に並ぶ水田を対象として北位水田に2ヶ所、中位水田に1ヶ所のトレンチを設定して実施した。本報告に関係する第2トレンチは、北位水田南辺部の建物建設予定範囲に設定した幅1m、全長12mを測る東西トレンチである。重機によってトレンチを掘り下げた結果、耕作土の地表下30cmの黄褐色～灰褐色砂礫層上面において柱穴・土坑・溝を検出した。遺構の覆土が異なる黒褐色と灰褐色の2種類あることから、遺構は少なくとも2時期以上に分かれて存続していたことが推定された。しかしながら、試掘調査で遺物は出土しなかったために各遺構の時期について断定する資料を得ることはできなかった。このため、周辺地における過去の調査成果や当該地東側に隣接する第21次調査における集落遺構などの状況を比較材料として検討した。その結果、試掘調査で検出した柱穴は当該地周辺で検出されている平安時代末～鎌倉時代に比定される中世集落の一部を構成する可能性が高く、建設予定地においては中世集落の遺構が展開しているものと判断するに至った。

#### 2. 発掘調査の概要

発掘調査は、試掘調査と周辺の調査成果から遺構に影響を与える建物建設予定範囲全体を対象とし、全体を一度に実施した。平成21年7月1日に耕作土と底土を重機によって除去の後、人力による遺構検出と各遺構の掘り下げを行った。その結果、遺構は試掘調査成果からの推定どおりに底土直下に位置する礫が大量に混じった黄灰色砂質土層上面において掘立柱建物の柱穴、溝、土坑を検出した。遺物は、縄文土器、瓦質土器、土師器、磁器、滑石製品などの石製品が出土したが、その総量はコンテナ箱1箱と少なく、大半は小片であった。調査は平成21年7月16日に終了した。

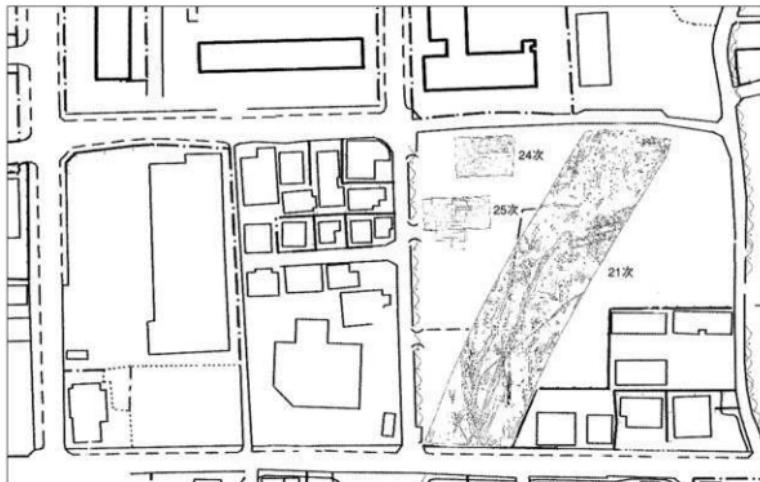


Fig.4 調査地位置図 (1/1,500)

### 3. 遺構

#### ( 1 ) 掘立柱建物 ( SB )

掘立柱建物は4棟を確認した。Fig.5で示すように柱穴が調査区全体で認められることから、本来は多数の建物が存在していたと考えられる。

#### 掘立柱建物 SB 01 ( Fig.5,6 PL.3,4 )

調査区南辺中央に位置する東西棟の側柱建物で、梁行二間、桁行三間の身舎に四面扉が付く。建物総長は梁行6.16m・桁行9.02m、身舎総長は梁行3.72m・桁行6.42mを測る。身舎柱間は、梁行柱間が北端間から1.92m + 1.80m、桁行柱間が東端間から2.15m + 2.13m + 2.14mを測り、身舎柱間寸法平均値は梁行1.86m、桁行2.14mである。四面扉は身舎の柱と柱筋を描いた柱筋型である。扉の出は、東妻側で北から1.28m・1.20m・1.28m、西妻側で1.32mを測り、平均値は1.27mである。北の平側は東から1.20m・1.15m・1.15m・1.20m、南の平側は1.21mを測り、平均値は1.18mである。東西方向に描えた桿筋(側柱筋)は真北から約99°西偏する。柱穴の柱掘方は、身舎および扉とともに壺掘りの円形もしくは隅丸方形の平面形状を呈し、径23~45cmを測る。縦じて扉柱掘方の方が小規模である。柱抜取穴は全ての柱穴で認められない。柱痕跡は明瞭に確認できるが、柱根は全て残存していない。また、穴底において沈下を防ぐような礎板等の措置は講じられていない。柱痕跡から推定される柱径は13cm~18cmである。残存する柱痕跡の深さは13~37cmを測り、各穴底のレベル差は、身舎で15cm、扉では1ヶ所を除けば15cmを測る。柱掘方壁と柱痕跡との間に拳程の大きさの石が遺っている。特に、身舎東側妻柱列の南と中央部の柱掘方からは大型の石鍋片、砥石、硯片等が出土している。

#### 掘立柱建物 SB 02 ( Fig.5 PL.3 )

調査区北辺部西よりに位置する東西棟の側柱建物で、建物の北半部は調査区外に位置する。身舎南側柱列の検出にとどまるが、梁行二間、桁行三間の身舎建物と想定される。身舎総長は桁行6.55mを測り、梁行は4.2m前後と推定される。身舎の桁行柱間は東端間から2.25m + 2.10m + 2.20mを測り、柱間寸法平均値は2.18mである。東西方向に描えた桿筋(側柱筋)は真北から約100°西偏する。

柱穴の柱掘方は、壺掘りの円形もしくは橢円形の平面形状を呈し、径23~25cmを測る。柱抜取穴は検出した全ての柱穴で認められない。柱痕跡の確認された柱穴において柱根は全て残存していない。また、穴底において沈下を防ぐような礎板等の措置は認められない。柱痕跡から推定される柱径は10cmほどである。残存する柱痕跡の深さは15~37cmを測り、各穴底の高低差は15cmを測る。

南東隅柱の柱穴において柱掘方壁と柱痕跡との間に拳程の大きさの石が遺っている。

#### 掘立柱建物 SB 03 ( Fig.5 PL.3 )

調査区中央部に位置する南北棟の側柱建物で、身舎間数は梁行二間、桁行三間である。建物総長は梁行3.43m・桁行6.16mを測る。身舎柱間は、梁行柱間が東端間から1.95m + 1.48m、桁行柱間が北端間から1.65m + 1.55m + 1.63mを測る。身舎柱間寸法平均値は梁行1.71m、桁行2.05mである。

南北方向に描えた桿筋(側柱筋)は真北から約10°西偏する。柱穴の柱掘方は、壺掘りの円形もしくは橢円形の平面形状を呈し、径21~30cmを測る。柱痕跡が確認できるが、柱根は全て残存していない。穴底において沈下を防ぐような礎板等の措置は講じられていない。柱痕跡から推定される柱径は13cm~15cmである。残存する柱痕跡の深さは16~38cmを測り、各柱穴底のレベル差は、身舎で15cmを測る。

#### 掘立柱建物 SB 04 ( Fig.5 PL.5 )

調査区中央部に位置する南北棟の側柱建物で、建物の北半部は調査区外に位置する。身舎南側妻柱列の検出にとどまるが、梁行二間、桁行二間以上の身舎建物と想定される。身舎総長は梁行3.55mを測る。身

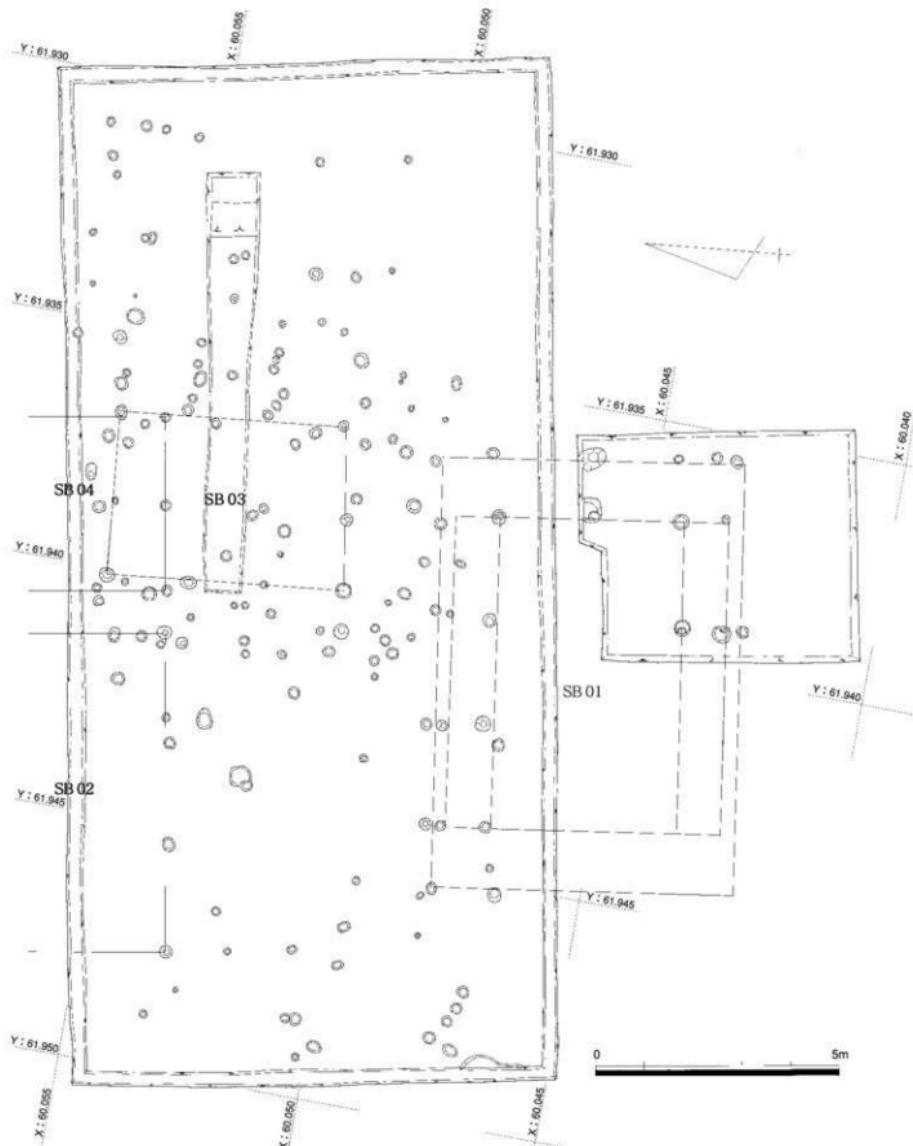


Fig. 5 遺構配置図 (1/100)

倉の梁行柱間は東端間から1.80m + 1.75mを測り、柱間寸法平均値は1.78mである。南北方向に揃えた棟筋（側柱筋）は真北から約10°西偏する。柱穴の柱掘方は、壘掘りの円形もしくは橢円形の平面形状を呈し、径20~23cmを測る。柱痕跡は確認できない。穴底において沈下を防ぐような礎板等の措置は講じられていない。残存する柱掘方の深さは22~26cmを測り、各柱穴底のレベル差は15cmを測る。

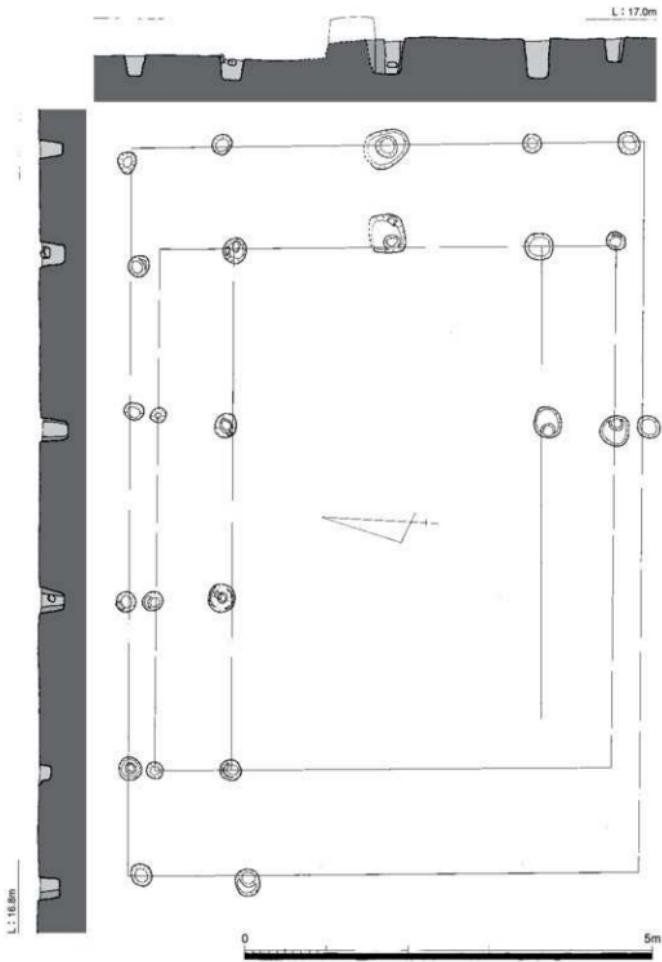


Fig. 6 掘立柱建物 SB 01 実測図 (1/60)

#### 4. 遺物

遺物は、柱穴などから縄文土器、土師器、瓦質土器、白磁、滑石製品、石製品が出土し、コンテナ1箱の出土総量である。

##### (1) 堀立柱建物 (SB)

###### SB 01出土遺物 (Fig.7 PL.5)

00003は口縁部を欠く、類の白磁の碗で、体部は底部から直線的に外反しながら立ち上がる。高台の削りは浅く平坦で、径7.6cmが復元される。施釉は内面から体部外面下部近くまで行われており、高台近くの体部と高台は露胎である。胎土は精選された乳白色、釉は灰白色を呈する。見込みに圈線や釉薬の残き取りは見られない。玉縁は幅広の形状が推定される。

00001は扁平な直方体を呈する砂岩で、一部を欠失する。最大幅9.6cm、残存長12.0cm、厚さ2.0~2.9cm、残重量466gを測る。面は全て研磨により滑らかで、中央部に向かって緩やかに下がる浅い窪み状の海を呈する。板状の転石を加工した観と考えられる。身舎柱穴の柱と掘方壁との間の詰石として使われている。

00002は滑石製の石鍋で、身舎南東隅の柱穴から出土した。底部を欠失し、復元内口径25.6cm、器厚2.1~2.4cmを測る。外面口縁部下には長方形の取手が4ヶ所に付く。外面には整形の削り痕跡が3cmほどの幅で稜線を呈して巡る。内面は滑らかに仕上げている。外面全面および、口縁部下の破面の一部に煤が付着している。これは鍋の口縁部に亀裂が生じた状況下でも使用していたことを示すものと考えられる。石鍋破損後の再利用を示すものか、口縁部に連続した削り痕跡が認められる。身舎柱穴の柱と掘方壁との間の詰石として使われている。

00005は砂岩製の砥石で、5角柱の形状を呈する。使用されているのは4面で、上・下面は自然面である。全長9.8cm、重量922gを測る。身舎棟妻柱と掘方壁との間の詰石として使われている。

###### SB 02出土遺物 (Fig.8 PL.5)

00006は身舎掘方埋土から出土した土師器の小皿で、口径10.2cm、底径8.0cm、器高1.3cmを測る。口縁は短く外反しながら立ち上がり、口縁端部はヨコナデで丸く仕上げている。胎土は、精選で0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

##### (2) その他の遺譲

###### 柱穴N07出土遺物 (Fig.9)

00008は弥生土器櫛の底部片である。底部外面は僅かに丸みを呈し、径8.4cmを測る。器面は内外面ともハケ目調整である。胎土は0.5~1mmほどの砂粒を多く含み、内面は淡黄灰色、外面は淡橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

###### 遺構検出時出土遺物 (Fig.10)

00007は弥生土器櫛の底部片である。体部は平坦な底部から直線的に外反しながら立ち上がる。外面はハケ目整形の後にナデ調整か。胎土は、1mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。焼成は硬質である。



Fig.8 掘立柱建物SB02柱穴出土遺物実測図（1/3）

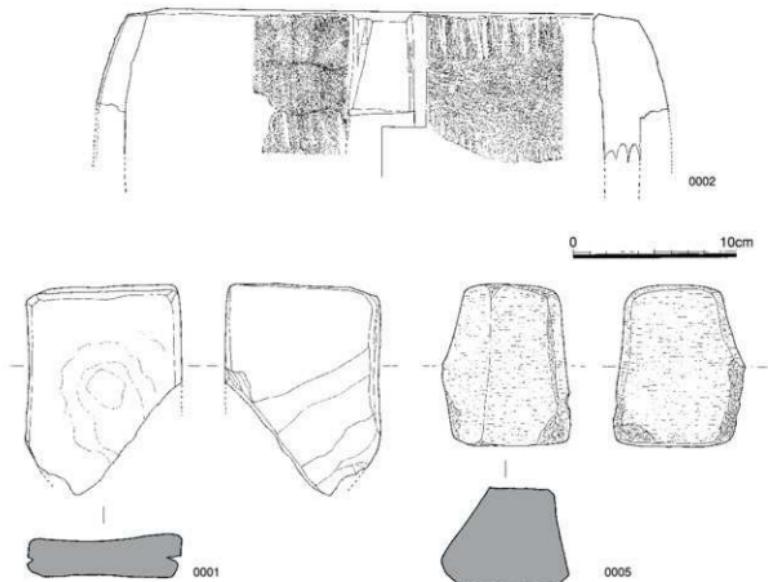


Fig.7 掘立柱建物SB01柱穴出土遺物実測図（1/3）



Fig.9 柱穴出土遺物実測図（1/3）



Fig.10 遺構検出時出土遺物実測図（1/3）

## IV まとめ

本調査では4棟の掘立柱建物の存在を明らかにしたが、ここでは本調査地に隣接する第14次調査、21次調査成果を含めて検討していくものである。

本調査で検出した掘立柱建物の建築時期は、出土遺物から12世紀を前後するものと考えられる。さらに、周辺の調査において検出された建物の大半と同時期であることから、集落の一部を構成していたと考えるのが妥当であろう。さらに、各調査で見られる建物の柱筋がほぼ同じか直角に位置していることは、一定の制約下における建築を示しているものと判断され、この考えを補強するものである。少なくとも、集落における建物方向の同一性は、当地における土地区画に大きく影響されていたことは間違いない。現況に遭る条里地割りの方向性に合致することは強い裏付けとなろう。

集落を構成する掘立柱建物の耐用年限は30数年と推定されているが、これは宮殿や官衙等の大規模な柱材を用いた場合であって、柱径が15cm前後の当該集落建物の場合にはそれよりもかなり短い耐用年数を考えるのが妥当であろう。ちなみに、身近な例として、常に雨水が当たり、湿乾を繰り返す状況下で方9cmの角柱の場合には、10年の耐用年数を超えることなく地表部の腐食により機能を果たさなくなつた。建物建築下の土質が乾燥した砂礫が展開する田村遺跡においても、掘立柱建物の宿命から50年を越えての建物存続は極めて困難であったろうと思われる。このことから、本調査地や周辺調査で確認された小穴は、集落建物の建替えに結びつくものと判断される。

本次調査で検出した掘立柱建物SB 01は、建築当初には梁行二間、桁行三間の身舎平側両面だけに廊が付く建物であったが、後年に廊の出を大きくした四面廊建物に改築した可能性があり、極めて興味深い。建物の全てを検出したわけではないため断定は避けるべきであるが、このような改築例が存在したとすれば、その背景には集落有力者の形成を物語るものと理解できよう。未調査区の範囲については今後の調査時に留意する必要があり、他の遺跡においての類例の検証を進める必要がある。

今回の調査では弥生土器の出土を確認した。遺物は破片であるが破面および器面において摩滅は認められないことから、先に述べた小穴の一部には弥生時代の竪穴住居に関連するものも含まれることが想像される。周辺調査においては縄文時代の遺物も同様な状況で出土していることから、当地においては、居住の継続性は認められないものの、各時代において人々のくらしが営まれていたと推定される。

# 図 版

## PLATES



( 調査風景 )



調査地周辺航空写真（1948年撮影）

(写真是国土地理院所蔵)



調査地周辺航空写真（2010年撮影）

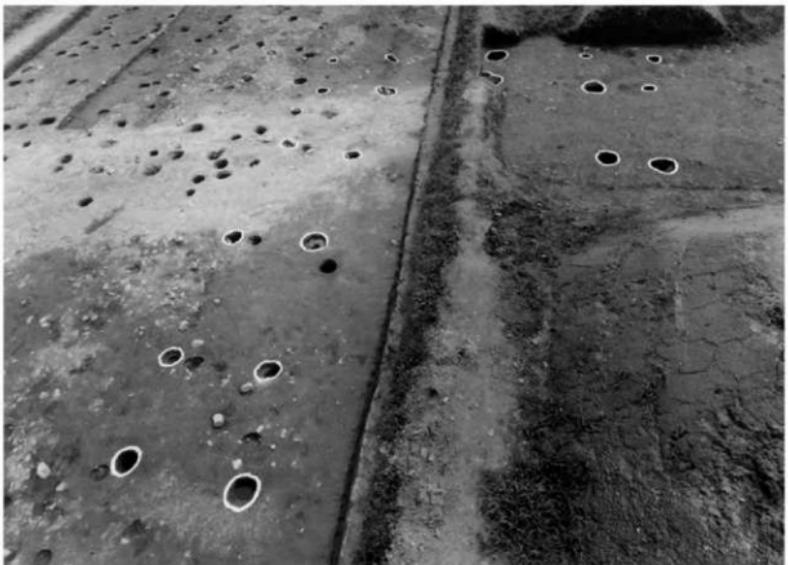
(写真是国土地理院所蔵)



(1) 調査区全景（南から）



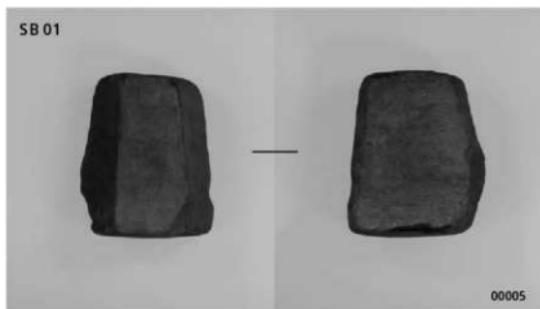
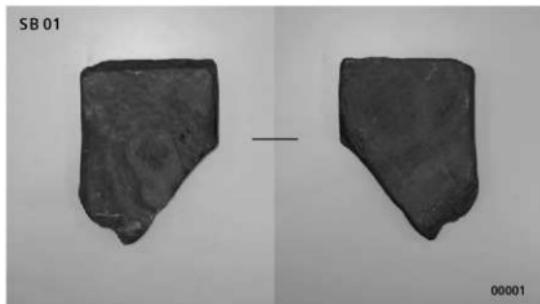
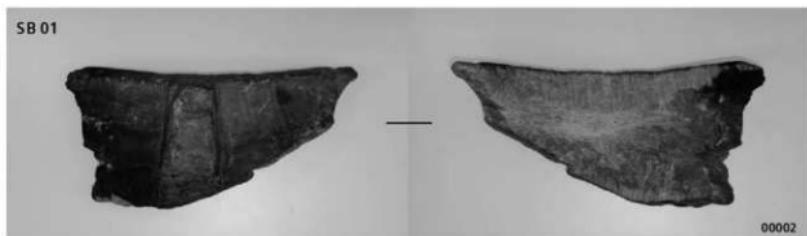
(2) 調査区全景（東から）



(1) 挖立柱建物 SB 01 (西から)



(2) 挖立柱建物 SB 01 (南から)



出土遺物

**報告書妙録**

書名ふりがな	たむら		
書 名	田村17		
副 書 名	田村遺跡第25次調査報告書		
巻 次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1118		
編 者 名	瀧本正志		
著 者 名	瀧本正志		
編集機関	福岡市教育委員会（埋蔵文化財第2課）		
発行機関	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 Tel. 092-711-4667		
発行年月日	2011年3月18日		
遺跡名ふりがな	たむらいせき	北緯（世界測地系）	33° 32' 22"
遺跡名	田村遺跡（第25次調査）	東経（世界測地系）	130° 19' 59"
所在地ふりがな	ふくおかんふくおかしさわらくたむら	市町村コード	40130
遺跡所在地	福岡県福岡市早良区田村四丁目60-1	遺跡番号	0317
調査原因	店舗建設	調査期間	2009.07.01 - 2009.07.16
種別	集落	調査面積	228.3m <sup>2</sup>
主な時代	中世（前期）	主な遺物	縄文土器・土師器・瓦質土器 須恵器・磁器・石製品
特記事項	四面廻廊立柱建物		

**田村 17**

— 田村遺跡第25次調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1118集

2011(平成23)年3月18日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

(092)711-4667

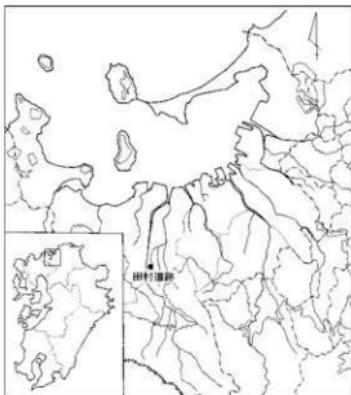
印 刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10

(092)611-0573

# TAMURA SITE

THE REPORT OF THE 25TH ARCHAEOLOGICAL EXACAVATIONS  
OF THE TAMURA SITE  
IN FUKUOKA, JAPAN



March 2011

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION